

月刊

2011

5
月号

みんぱく



特集

文化交渉のダイナミズム

——あたらしくなったアメリカ展示

出会う——異文化との接触と交渉 関 雄二

宗教カレンダーから民族移動を見る 中牧 弘允

イヌイット・アートと著作権 岸上 伸啓

許可なく撮るべからず 伊藤 敦規

時代を記録するやきもの 齋藤 晃

名人の看板 鈴木 紀

豊かな海と陸の資源に恵まれた三陸から房総にかけての太平洋沿岸の目を覆いたくなる惨状。そのうえ、福島第一原発の忌まわしい事故が重なる。

三陸海岸に「津波でんでんこ」ということばがある。津波のときは他人におかまいなく各自で逃げろ、という教訓。明治の三陸大津波（一八九六年）で二万二〇〇〇人を失った経験からうまれたという。戦後、人びとはこのような自己防衛だけでなく、長大な防潮堤を築き、避難訓練をくりかえすなど、「万全な」津波対策を講じてきた。しかし、東日本大震災は、自然のエネルギーの前にはいかなる人間の営みもあらがえないことを実証した。

これから、被災地のみなさまは希望を胸に、自らの力と国・行政やNGOなどの支援を活用して、復旧・復興に歩みだすことになる。ここで復興の手掛かりとなる話を紹介しよう。ひとつはミクロネシアのサンゴ礁島民の体験。一五〇年前に大波が島を洗い、作物が全滅したとき、首長は島民の半数を遠くの高島（火山島）に集団移住させた。それから現在までも二島の住民は相互訪問し、災害時の援助や伝統文化の交換をおこなっている。ふたつ目は、インドネシアのジャワ島中部地震（二〇〇六年）の話。ジョクジャカルタ地方では、ゴトロンヨンという相互扶助の慣行が村の生活を支えてきた。こ

東日本大震災におもう

「結い」でつながる「まち」づくりを

須藤 健一 国立民族学博物館長

の慣行は、震災後にも生かされ、若者が自前の材料と労力を出しあって家を再建し、村を復興させた。ふたつの話は、平坦な島の住人が現住地の他にも住める場をもつこと、復興には日本の「結い」のような人と人の信頼とつながりが重要であることを教えてくれる。

東日本大震災からの復興の過程で、被災地で生活を共にする人びとが互いを支え合う多様なつながりのもとに、あらたなコミュニティ（まち）と市民社会を築くことを期待する。そして、わたしたちは今こそ、便利で楽な「よりよいくらし」志向から、自然とのつながりを見直し、「身の丈にあったくらし」のありようを再考するときかも知れない。

みんばくは、大学共同利用機関として、また博物館としてこの苦難にどのようにかわるのか。第一には、被災地の研究者が、本館の研究資料を利用できる種々の研究支援をおこない、第二には、被災地の博物館、資料館、寺社などの壊れた文化財や民俗資料などの保存や修復などを手伝い、第三には、海外にもつて日本の状況、とりわけ教育研究の現況についての的確な情報を送信することである。

そして、これからの復興に生かすためにも、後世の人びとに二度と味わわせないためにも、「悲惨な記憶」を記録にとどめることが文化人類学とその関連する研究分野の大事なしごとになる。

月刊
みんばく
5月号日次

- 1 東日本大震災におもう
「結い」でつながる「まち」づくりを 須藤 健一
- 2 **特集 文化交渉のダイナミズム**
——あたらしくなったアメリカ展示
- 3 出会う——異文化との接触と交渉 関 雄二
- 5 宗教カレンダーから民族移動を見る 中牧 弘允
- 6 イヌイット・アートと著作権 岸上 伸啓
- 7 許可なく撮るべからず 伊藤 敦規
- 8 時代を記録するやきもの 齋藤 晃
- 9 名人の看板 鈴木 紀
- 10 研究フォーラム
布からモノの働きを知る
関本 照夫
- 12 みんばく Information
- 14 企画展案内
企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」
吉田 憲司
- 16 散策と思索の径
「ラチオ塔」を訪ね歩く
吉井 正彦
- 18 多文化をささえる人びと
門真市立砂子小学校の取り組み
中国にルーツをもつ子どもたちのために
高橋 朋子
- 20 歳時世相篇
こどもの日と鯉のぼり
中牧 弘允
- 22 フィールドで考える
聖典の朗読を競う少女たち
小杉 麻李亜
- 24 次号予告・編集後記



相互交渉が始まる

しかしながら、抑圧のベクトルは、あらたなものも生み出した。先住民は、植民地下、文明化と称して押しつけられた西洋起源の衣服に太古のむかしから育んできた技術を適用し、自らのアイデンティティをあらわす紋様を縫い込み、世界でも屈指の染織文化を築いた。また強制布教されたキリスト教を、自らの世界観の枠組みで組み替え、アメリカ大陸独自の宗教世界を創り出した。アメリカ展示場の新構築では、そうした人類史上まれな規模の成熟した文化同士の遭遇と、その後の相互交渉の過程で生み出された文化を紹介している。

この視線は、アメリカ大陸外部とのつながりにも向けられる。西洋基準の普及をグローバル化とよぶならば、植民地化のプロセスは、確かにグローバル化の先駆けともいえるが、その現象は一方だけに向けられたのではない。展示で示すように、旧大陸からもたらされたサトウキビの栽培は瞬く間にアメリカ大陸に広がり、世界的拠点となる一方で、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモなどアメリカ大陸原産



祭壇「パチャママの門」H0210691

出会う——異文化との接触と交渉

関雄せむらうじ 一 民博 研究戦略センター

唐突な出会い

アメリカ展示場最初のコーナーは、展示全体のコンセプトを語る「出会う」である。アメリカ大陸に人類が渡ったのは、今から一万四〇〇〇年前ごろともいわれる。以来、北半球の亜極地域から南半球の亜極地域にまで拡散した人類は、一五世紀の末になるまで、旧大陸とほとんど接触をもたぬまま、古代文明を含む独自の文化を築き上げた。その意味で、クリストバル・コロン（コロンブス）によるアメリカ大陸の「発見」は、この地で暮らす先住民にとっては、あまりに一方的な見方であるばかりか、ヨーロッパ人による植民地化によって、自文化を変容させざるをえなかった悲劇の意味合いが強い。



文化交渉のダイナミズム

——あたらしくなったアメリカ展示



土人形（歯医者）
H0210115

アメリカ展示が変わるのは今回で三度目となる。
一九八六年、それまで不足していた中米地域の資料収集が進んだことを受け、一部改編をおこなった。
二〇〇三年には、地域別展示を改め、文化を理解するための基本展示として「食べる」「着る」「祈る」の三つのコーナーをもうけ、さらに地域テーマ展示のコーナーをつくった。
今回は、地域テーマ展示を「創る」コーナーに改めた。そこでは、アイデンティティの表現を試みる作家たちの作品が展示されている。既存の「食べる」「着る」「祈る」のコーナーも手直した。
インターネットの普及により、これまでの知のありかたが大幅に変わりつつあり、新しい価値が探し求められている。そのためには世界を多角的にみることも必要である。
カナダからアメリカ合衆国、中米、南米、カリブ海まで広くアメリカ大陸全体（アメリカス）における多様性と歴史を明らかにしようとするあらたなアメリカ展示が、その一助となることを願っている。
（ハ杉佳穂 民博 民族文化研究部）



「クランの移住神話」
H0268555



トウモロコシ



カーニバルの衣装
H0203720 ~ H0203724

の栽培植物は、ヨーロッパ経由で世界中に拡散し、食卓の風景を変え、人類の飢餓を救った。

真剣勝負は続く

そして、現在、アメリカ大陸は、アメリカ合衆国に代表されるように、かつてないほどの速度をもって拡大する世界経済の中心のひとつであり、大陸の隅々にまでこの状況は波及しつつある。しかし、ここでもグローバル経済の作用は一方向ではない。情報メディアの発達、たとえば、ペルー起源のチチャヤテクノクンビアなど、都市に移住した先住民や混血メスティソが創った音楽の西欧進出を助け、また考古学者や人類学者が示す過去や現在の文化についての情報は、観光市場をにらんだ民芸品の創作の糧となることも珍しくはない。なかには西洋社会が産み出した美術市場に乗り出し、芸術家を名乗る者さえ登場してきている。

これもそれも、植民地化の試練に耐えながらも、生存を模索し続けることが可能なほど先住民が育んだ文化の蓄積が膨大であったがためであり、同時に変容を生み出すモデルとなるほど西欧文化の側にもパワーと魅力が存在したからである。この真剣勝負の文化交流のダイナミズムを各展示コーナーから受け取っていただければ幸いである。

ワシの頭つき首飾り
H0219579



ウシの仮面
H0126922



宗教カレンダールから 民族移動を見る

なかまき ひろちか
民博 民族文化研究部

日づけを語らない

「祈る」の空間には時間表象にかかわる三つの展示がある。ひとつは巨大な「アステカの暦石」、もうひとつは「アンデスの暦」、そしてあなたに加わった現代の宗教カレンダールである。

「アステカの暦石」には死滅した四つの時代や一周期二六〇日の暦法が絵画的に刻まれている。メキシコの国立人類学博物館を代表する展示資料(複製)であり、民博の開館当初からコロンブス以前のアメリカ文明を象徴してきた。

かたや「アンデスの暦」は二〇〇三年の展示リニューアルのときに初登場した。スペイン人がもち込んだキリスト教(カトリック)と先住民の信仰が融合した一二月の年中行事が造形化されている。それはコロンブス以後のアンデス社会がうみだした宗教変容を雄弁に物語っている。

しかし、両者とも暦と命名されているが、日にちを知るものではない。アステカの時間観やアンデスの年中行事が表象されているだけで、日づけの点ではまったく役に立たない。

多様性を示す

今回、ようやく日づけのついたカレンダーが仲間入りした。とはいえ、年月日を示すのが主たる目的ではない。

ねらいは、特に二〇世紀以降、アジアや中東から仏教、ヒンドゥー教、あるいはイスラームなどの諸宗教がアメリカ大陸に伝播した事実を示すことにある。キリスト教やユダヤ教だけでアメリカスの宗教を語るわけにはいかない。カレンダーは民族移動や宗教伝播をあらわす展示資料としてえらばれたのである。

新世界で競い合う

カトリック・カレンダールにはメキシコやブラジルのオーソドックスなものほかに、シカゴ大司教区の発行した凝ったものがある。くわえて韓国系や日系の信者に向けたものがある。とりわけ日本人のブラジル移住一〇〇周年を記念したものは、出移民を出エジプトになぞらえるなど、移民の歴史を聖書の聖句で意義づけたすぐれものである。

プロテスタント・カレンダールとしては米国のラジオ伝道のものや韓国系メソジスト教会のものを選択した。前者は、旺盛な宣教精神とそれをささげる支援者の存在に、後者は米国における民族教会としての役割にそれぞれ注目したからである。

太平洋を越えて米国に渡った移住者集団には中国人やインド人も含まれる。中国系雑貨店が作成し顧客に配ったものには干支(戌)のモチーフがあり、「福」の字が添えられている。太陰太陽暦(中国の農曆)の日づけもついている。かたやインド系の商店で配られていたのは商売繁盛や知恵の神とあがめられている象のガネーシャを圖案化したものである。

他方、日本の宗教カレンダールにはひと月分の日めくりが多い。年一回同じ文言をながめ、教祖の教えをありがたく味読することに重点が置かれている。これは日常の生活倫理が日系宗教のひとつの魅力であることをうかがわせる。

このように新世界のアメリカスには今やアジア系の宗教が渡来し、大西洋を渡った先着のキリスト教などと、しのぎを削るようになってきているのである。



中国系アメリカ人の顧客向けカレンダー
H0268826



カトリックの日伯司牧協会が発行したカレンダー



「クランの移住神話」(H0268555)を制作するホビのジェロ・ロマベンティマ氏

不安を抱きながら

米国先住民に限らないが、先住民一般を学術調査の対象と設定する場合には、さまざまな制度的な難しさがあることはよく知られている。今回の資料収集についても同様で、展示・公開を前提とした映像資料の撮影が決定してから、被写体となるアーティストだけではなく、彼が属する村落の指導者と、ホビ・トラ

料収集についても同様で、展示・公開を前提とした映像資料の撮影が決定してから、被写体となるアーティストだけではなく、彼が属する村落の指導者と、ホビ・トラ

ふり返ってみると
本館展示場で流れている制作工程の映像や情報端末による作品解説などは、長期間におよぶ交渉の賜でもある。今思い返すと、近郊都市の空港に降り立ったときに感じた肌寒さは、いよいよ直接交渉の日が近づいたことへの緊張のあらわれだったのかも知れない。

許可なく撮るべからず

伊藤 敦規 民博文化資源研究センター

猛暑の大阪から

二〇一〇年夏、大阪は記録的な猛暑となったが、米国南西部は比較的涼しく、深夜近くにアリゾナ州フラッグスタッフの空港に降り立ったときには鳥肌が立つほど肌寒かったと記憶している。

二〇〇三年以来九度目となった米国先住民ホビの保留地訪問の目的は、民博のアメリカ展示新構築のための資料収集であった。それまでも、そこに暮らすアーティストやギャラリー経営者から話を聞かせてもらったお礼に、作品を購入することとは何度もあった。そのため、宝飾品の購入自体は、それほど大変な任務とは思っていなかった。ところが、今回の訪問の目的である資料収集は、単にモノとしての宝飾品収集だけを意味したわけではなかった。素材購入から完成までの一連の作品制作のプロセスを、映像資料として記録することもひとつの目的だったのである。

イヌイト・アートと著作権

岸上 伸啓 民博 先端人類科学研究部

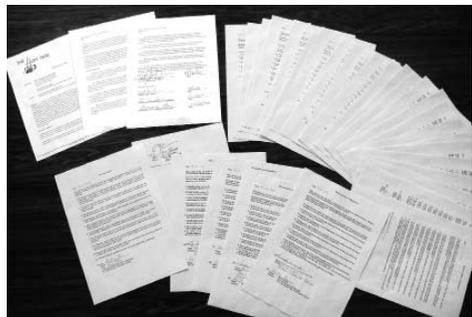


「魔法をかけられたフクロウ」(ケノジュアク・アシェバク作、1960年) 写真提供：ケーブ・ドーセット美術

る場合には、博物館や美術館の所有物であっても原作者の許諾が必要になっている。日本でも民族学資料であっても特定の作家がつくったアート作品である限り、その写真の利用に際しては著作権の処理が不可欠と考えられるようになった。

苦勞の末に

今回の新構築や二〇〇九年度民博特別展においてイヌイト版画を出版したり、展示で写真を利用したりするために、作家自身もしくは関係者から許諾をとる必要が生じた。このため、作家や、亡くなった作家の家族を探し出し、連絡をとるなどしたが、大変に煩雑で、骨が折れた。その一方で、見知らぬ作家やその家族との接触を試みたことによって、彼らの作品がわたしにはより身近なものになったような気がする。



今回の資料収集で取得した、調査・撮影許可証と資料の展示等に関する同意書の数々

イブ政府の文化行政担当である文化保存局からの調査・撮影許可の取得に向けた交渉を繰り返すことになった。

そもそも米国南西部の先住民の多くは、保留地内に点在する村落の屋外での写真・ビデオ撮影、スケッチなどあらゆる記録行為を禁止している。特に仮面儀礼がおこなわれているときには、宗教

結社の成員が観光客などのよそ者の行動に監視の目を光らせる。幸い、宝飾品制作プロセスは工房内での撮影が可能であるため、アーティストと村落の指導者からはメールでの数回のやりとりで撮影の許可が下りた。ただし、トライブ政府の担当者との事前の交渉はそれだけでは済まず、撮影目的等の説明を伴う政府機関での面談が条件とされた。フラッグスタッフから一五〇キロメートルほど離れた保留地へと車を走らせているときも、不安が消えることはなかった。被写体となる予定のアーティストのフォローもあり、一時間ほどの面談の後にトライブ政府向けの期間限定の「調査・撮影許可証」が発給された。

時代を記録するやきもの

齋藤 晃 民博 先端人類科学研究部

古代のやきもの造りの再興

チュルカナスのやきものは、一九七〇年代にペルー北部ピウラ県チュルカナス市で誕生した新しい工芸品である。しかし、制作者組合の作品紹介や販売業者の商品宣伝では、ペルー北海岸の古代文化、とりわけピクス文化（紀元前後〜六〇〇年ごろ）との連続性が強調されている。実際には、この連続性は一九世紀中葉に作り出されたものである。



壺(チチャ売の) H0205415

カマヨク（やきもの師）というグループが結成され、そのメンバーのひとりヘラシモ・ソサがピクス土器の装飾技法を再現することに成功した。これにより、チュルカナスのやきものスタイルが確立した。

「今」を伝える

チュルカナスのやきもの成立のプロセスには、相互に関連する一連の変化が積み重なっている。

①古代土器の出土を契機とする地域の歴史の創作。ピクス土器の制作者が現代のピウラの人びとの祖先とみなされ、そこから、失われた祖先のやきもの造りを再興しようとする運動が生じる。

②他者の視点の内面化による自画像の構築。地域の自然や人間の暮らしが文化や伝統とよばれる有機的総体とみなされ、その総体が近代化や西洋化により失われつつある真正な世界のありようと理解され、保護や救済の対象となる。

③日用品の民芸品への転換。チチャの生産や運搬に使われていたやきものが、実用性を失って装飾・観賞用の作品になるとともに、地域の文化や伝統を体現する民芸品へと変貌する。

やきもの制作者自身はこのプロセスをどのように認識しているのだろうか。ヘラシモ・ソサは、自分の作品の風物描写をピクス土器の動物像や人間像と比較して、やきもの造りはドキュメンタリーの一つであると述べている。彼によれば、やきもの師のつとめは、むかしも今も、自分が生きる時代を記録することなのである。つまり、ピクス土器が古代の自然や人間の姿を今に伝えてるように、チュルカナスのやきものも、やがて消滅するだろう現代のピウラ県の風物を後世へ伝えていくのである。



土人形(チチャ造り) H0210591

背景：土人形「豊稔」 H0210476

もともとピウラ県には、チチャ（トウモロコシの醸造酒）の生産や運搬に使われるやきもの造りの慣行がふるくから伝わっていた。一九六〇年代初め、ピクス土器の出土を契機として、若い陶工のあいだで古代の制作技法や装飾モチーフを取り入れた新しいやきものを造ろうという気運が高まった。当時、診療所の看護婦を勤めていた米国人修道女グロリア・ジョイスが、北米先住民の美術やアンデス考古学の知識を彼らに伝え、創作活動を支援した。一九七〇年代には「サニヨ・

名人の看板

鈴木 紀 民博 先端人類科学研究部



木彫(アルマジロ) H0268544

出会いは一〇年前

新しい展示を準備するにあたってわたしが思い浮かべたのは、メキシコのオアハカ州で制作されるアレブリアヘだった。それは二〇〇一年の夏以来わたしの瞳に焼きついている。州都オアハカ市の近郊にあるサン・バルトロ・コヨテベック村の資料館を訪問した際、明るい日が差すパティオに置かれた不思議なオブジェが目にとまった。アルマジロの木彫で、甲羅と尾はグレー、胴は水色で彩色され、ユーモラスな形が印象的だった。その日の午後オアハカ市にもどって民芸品店を覗くと、たくさんのアレブリアヘが売られていることに改めて気がついた。カラフルな装飾をほどこされた動物たち。愛嬌ある表情。アレブリアヘとは「空想的な生き物」の工芸品のことである。

体に創造的な雰囲気があふれていた。なんとかこの感じを民博の展示場でも再現できないだろうか。そう考えてわたしは、木彫だけでなく看板も集めることにした。

看板を下ろさせる

アントニオ・マンダリン氏はこの村で名人と目される作家の一人である。彼の評判はオアハカ州立民衆芸術美術館館長のカルロマグノ・ペドロ氏から聞いていた。マンダリン氏の家は村のほぼ中央にあり、眺めのよい工房からは、サポテカ族の山上遺跡モンテ・アルバンが手にとるように臨める。彼の作品もすばらしかったが、わたしが気に入ったのは看板の方だった。ARTESANIAS MANDARIN（民芸品マンダリン）という文字とともにアレブリアヘの典型的なモチーフであるドラゴンが描かれている。しかも薄い金属性で、展示するには手ごろな大きさだった。さっそく交渉に入った。人のよいマンダリン氏は、最初は当惑ぎみだったものの、看板を売却することに同意してくれた。問題は金額である。わたしも彼もまるで見当がつかない。わたしはためしに思いついた額の半額をいってみた。彼は無言。どう返事したらよいか困っているようだった。そこにすかさず割って入り、その五割増しの値段を主張したのは、しっかり者の彼の奥さんだった。交渉成立。わたしも収集予算を有効に使えた気がして満足だった。きっかけが無理強いたつもりはないが、よく考えると、わたしは名人の看板を下ろさせたことになる。マンダリン氏が看板を新調し、ますます円熟した作品を生み出していくことを願ってやまない。

木彫(ウサギ) H0268543



マンダリン氏の玄関に掲げられていた看板。現在はアメリカ展示場に展示中 H0268529

雰囲気を出したい 二〇〇九年、民博にアレブリアヘを展示することが正式に決まり、資料収集のため同じオアハカ州のサン・アントニオ・アラソラ村を訪問した。ここはアレブリアヘの里として知られており、作家の工房の前にはそれとわかる看板が掲げられていた。木彫同様どの看板も個性的で、村全



アントニオ・マンダリン氏と彼の作品



布からモノの働きを知る

せきもと てるお
関本 照夫

民博 先端人類科学研究部

わたしたちは今、「布と人間の人類学的研究」というプロジェクトを新しく始めたところである。これは、民博が進めている機関研究「マテリアリティの人間学」の一環となる。布の人類学的研究、さらには布と人間の人類学的研究といっても対象は広く漠然としている。何を目指しているのか。

布の風合

「風合・ふうあい」ということが、布について語るときよく使われる。布に手で触れたり身にまったりして、柔らかさ、ざくつとした感じ、その他なんでも身体に感じる感触から「軽い風合」、「しなやかな風合」、さらには「涼しい風合」、「麻のような風合」など、さまざまにいう。触感に限られている訳でもなく、色、柄その他見た目の感じ、匂いなどあらゆる感覚を含んだ総合的なことばである。身にまとして涼しいのか暖かいのかも風合の内だ。もし英語にするなら「フィール」が近いのだろう。手にとり身につけて使うモノを、人はすべて総合的感覚で捉えるのだが、布について特にいわれる「風合」ということばは、布とのつきあいに肌で感じる微妙で多様な感覚が欠かせないことを、よく示している。

布が人に働きかける

博物館・美術館で布が展示されていたとする。目で眺めるだけでは何とも物足りないのだが、しばしば「手で触れないでください」という注意書きがつけられている。見るだけでなく、手にとり指先に触れ、裏を返し、さらには掌に乗せて重さ・軽さを確かめ、腰に巻いたり肩に羽織ったりしてみても、ようやくほんとうに「見た」ことになるのが布である。

布は帆船の帆にもなり、工業用にも使われるが、まずは身につける布から考えたい。単に身につけるといふより、産着から吊いまで、一生涯を包んで人から離れないものである。人の外部にあって人が利用するものというより、個々人にとってもっとも身近な環境の一部、まるで意志をもって人に働きかけるような存在である。モノと人の相互作用を考えるのに、布はありふれて身近なものだが、とても興味深い研究の材料を与えてくれる。

ここまでのいきさつ

わたしを含めたこの機関研究プロジェクト



北タイの村、男の織手は少ない

トのメンバーは、これまでそれぞれ別々に、伝統染織の生産や消費の研究をアジア各地で進めてきた。焼き物や剪纸の研究者もあり、比較の仕事で支えてくれている。とはいえ、メンバーの多くは自分で布を織ったり染めたりする技をもたない人類学畑の研究者である。

研究の目標

係でつながり、何のために布を作っているのか、技はどのように世代を越えて受け継がれるのかという研究である。また、わたし自身がインドネシア・ジャワ島のバティック(更紗)をめぐる研究をしてきたように、特定の地域の特定の布に焦点を当てた、いわゆるモノグラフィ的研究が多く生み出されている。

今始まったわたしたちのプロジェクトが目指しているのは、第一に、「モノ」としての布の研究とそれにかかわる「人」の研究とをつなぎ、モノと人の相互作用を考えることである。人がどう布を作り使うかという一方的な見方ではなく、布の人に与える作用・影響をも含めたふたつに切り離せない関係を突き止めたい。先に触れた風合ということも、そのひとつのヒントである。

布をめぐる人類学的研究の見方・方法をより大きな見取り図に示すことである。最近では学生や若い研究者のなかに、手仕事、工芸、物づくりに関心を寄せる人が増えている。そのあいだに生産的対話を育てるにも、こうした作業が必要である。人にだけ、その思考能力だけに主役の座を与えるのではなく、モノや環境から人が作り出されるもの、モノや環境から人が作り出されるもの、ことを、より説得力のあることばで示し、人類学や人文社会科学を越えた広い貢献ができる研究を目指している。



ラオスの国内難民村に開いた布市場

布の消費者だけではなく、作る人も売る人も素材や製品に影響され、全感覚を通じてモノや環境と交流している。このことをもっと見通しの良いことば・概念で語るにはどうしたらよいか。第二に目指すのは、個々のモノグラフィ的研究を横につないで、



ジャワのスタンバティック職人

機関研究

マテリアリティの人間学

「布と人間の人類学的研究」

2011年1月〜2013年3月

代表者・関本照夫

◆ 企画展 「民族学者 梅棹忠夫の眼」
梅棹忠夫が、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら46点を選び、国内各地で開催した写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を再現します。
会期 6月14日(火)まで
会場 本館展示場内

◆ みんなくセミナー
詳細は13ページをご覧ください。

◆ みんなくウィークエンド・サロン
みんなく名誉教授が梅棹先生の人柄や研究についてお話しします。詳細は24ページをご覧ください。

特別展
「ウメサオタダ才展」
みんなく初代館長・梅棹忠夫の軌跡をたどり未来をみつめる特別企画
日本などのような問題も、日本だけでは解決できない、そんな現代だからこそ、世界への知的好奇心は欠かせません。世界中を歩きさまざまな感動を記録した、梅棹忠夫の生涯を、みんなくで「探検」してください。そして、世界へのあくなき好奇心をお持ち帰りください。
会期 6月14日(火)まで
会場 特別展示館



1980年館長室にて

◆ みんなく映画会／みんなくワールドシネマ
「海を飛ぶ夢」
実施日 5月28日(土)
時間 13時30分～16時30分(開場13時)
会場 講堂
定員 450名
※参加無料、申込不要
※当日10時から会場入口にて整理券配布
お問い合わせ
広報企画室 企画連携係
電話 06-6878-8210

◆ 公開タンストークショップ
「インド刺繍〜思いと出会う・願いでつながる」
インド西部の刺繍との出会いをもとに、ダンス表現を創り、発表するワークショップです。
実施日 6月5日(日)
時間 10時～16時30分
場所 第5セミナー室、第7セミナー室など
※要申込(見学は自由です。詳細はホームページ)
※このワークショップは、東日本大震災の影響により中止となった企画を、日程と内容を変更して開催するものです。被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

【研究部の新メンバー】
伊藤敦規 助教(文化資源研究センター)が4月1日付で着任しました。日本学術振興会特別研究員(PD)・国立民族学博物館を経て現職。専門は社会人類学、アメリカ先住民研究。論文に「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて」、「協働作品としての『水』・『ズン作家展』」
北米先住民の知的財産保護に向けた日本での実践」などがある。

齋藤玲子 助教(民族文化研究部)が4月1日付で着任しました。北海道立北方民族博物館学芸員を経て現職。専門は北方地域先住民の文化人類学、特にアイヌ民族と北海道先住民。著作に「極北地域における毛皮革の利用と技術」(北海道大学出版会)「環北太平洋の環境と文化」所収、「極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの航海」(共編)「昭和堂」などがある。

菅瀬晶子 助教(民族社会研究部)が4月1日付で着任しました。日本女子大学ほか非常勤講師、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員を経て現職。専門は文化人類学、中東地域研究。ことに東地中海アラブ地域。著書に「イスラエルのアラブ人キリスト教徒」(深水社)、「新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒」(山川出版社)などがある。



みんなくラジオ「世界を語る」
みんなくのお話をお話するラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪(1314kHz)
毎週水曜日 23時30分から24時

毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」
みんなくの研究のエッセイが毎週水曜日に掲載されています。

*詳細については、みんなくホームページをご覧ください。
*お問い合わせの受付時間は9時から17時(土・日・祝を除く)です。

刊行物紹介

■松本博之編
『海洋環境保全の人類学——沿岸水域利用と国際社会』
国立民族学博物館調査報告 No.97

■ウリヤンハイ L. テルビン
ウリヤンハイ T. チョローンエルデネ共編
『チベット・モンゴル対訳語彙集』
国立民族学博物館調査報告 No.98

■Tsuguhito Takeuchi, Burkhard Quessel and Yasuhiko Nagano(eds.)
『Research Notes on the Zhangzhung Language by Frederick W. Thomas at the British Library (Bon Studies14)』
国立民族学博物館調査報告 No.99

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。)

第396回 5月21日(土)
【特別展ウメサオタダ才展関連】
青年ウメサオタダ才の学問形成
講師 中生勝美(桜美林大学 教授)
聞き手 小長谷有紀(国立民族学博物館 教授)



終戦間際の張家口に、伝説の研究所と呼ばれた西北研究所がありました。この研究所の半分以上の所員が著名な人類学・生態学の学者となりました。今回の発表で、若き日のウメサオタダ才が、ボナベ、大興安嶺、冬のモンゴル草原縦走を通じて、どのように学問形成をしたのか、1998年にインタビューしたビデオテープの証言を元に発表します。

第397回 6月18日(土)
布・人・技、そして環境
講師 関本照夫(国立民族学博物館 特任教授)



モノと人の関係、人と人の関係を、インドネシアの布作りから考えてみます。モノは「できる」のか、「作られる」のか、という疑問です。人が布を作るといのが常識です。でも人は、モノや環境を自由に操る万能の存在ではありません。モノ、技、人が絡み合う環境からモノも人も「出きてくる」と見てはごどうでしょうか。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第396回 6月4日(土) 14時～15時
【特別展ウメサオタダ才展関連】
梅棹忠夫と民族誌写真
講師 吉田憲司(国立民族学博物館 教授)
日本写真家協会会員でもあった梅棹忠夫先生は、民族学調査での写真の活用について独自の見識のもと、世界各地で、その地に暮らす人びとの姿をカメラに収めました。「梅棹忠夫写真コレクション」は民博に寄贈され、現在その整理や情報化作業をすすめています。企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」の開催にあわせ、梅棹先生がカメラ・レンズを通じて眼を凝らすとした世界を改めて見つめ直します。
※講演会終了後、企画展見学会があります。

第397回 7月2日(土) 14時～15時
織フェルトの敷物づくり
かれらはなぜつくり続けるのか?
講師 上羽陽子(国立民族学博物館 助教)

東京講演会

第98回 6月26日(日) 14時～15時
梅棹忠夫先生の学問世界
講師 松原正毅(坂の上の雲ミュージアム館長、国立民族学博物館 名誉教授)
梅棹忠夫先生は、「幻視の行為者」としての人生を歩まれてきました。そのあゆみは、みごとくいつてよいものです。梅棹先生の学問世界をささえていた三つの要素は、持続力、越境力、発見力だともっています。今回の講演会では、この三つの要素を中心にお話したいと考えています。
会場 東京都中小企業会館講堂(銀座)
定員 130名(要申込)

「友の会」入会キャンペーン実施中

6月末までに新規ご入会の方にはオリジナルグッズを進呈しています。新規会員をご紹介くださった会員の方にもお贈りします。ぜひこの機会にご入会ください。

特別展「ウメサオタダ才展」
関連商品のご案内

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
[World Wide Bazaar]
http://www.senri-f.or.jp/shop/

梅棹忠夫が1940年に樺太にてイヌゾリの研究で描いたスケッチをもとにクリアファイルを作成しました。サイズはA6、A5、A4の3種類。
「梅棹忠夫のことは」小長谷有紀著は梅棹忠夫の書いた文章の中から、10のテーマごとに10のことはを選んだわかりやすく解説しています。知的山脈をのぼるためのガイドブックとして、絶対におすすめです。



クリアファイル A6・250円、A5・300円、A4・350円、3種セット 800円
ポストカード (4種) 各105円、4種セット 380円 ※以上すべて税込
『梅棹忠夫のことは』河出書房新社
著者：梅棹忠夫 編著者：小長谷有紀 定価1,365円(税込)

「民族学者 梅棹忠夫の眼」

よしだ けんじ
吉田 憲司
民博文化資源研究センター

民博を創設し、初代館長を務めた梅棹忠夫は、その生涯において地球上の各地を歩き、世界の諸民族の生活をフィールド・ノートに丹念に記録するとともに、人びとの姿をカメラにおさめた。「写真はフィールド・ワークのための武器として欠かせないものだ」と梅棹はいう。梅棹の明晰な文化論も壮大な文明論も、この地に足のついたフィールド・ワークをもとに築きあげられたものにほかならない。

一九八二年の段階で、梅棹忠夫は、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら四六点を選び、東京銀座のニコンサロンで、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を開催した。その写真展は、その後、二〇一〇年までのあいだに国内各地六カ所で開催された。梅棹自身、「この写真展でわたしがしめたかったのは、これらの写真がすべて民族学の

フィールド・ワークの産物だ、という点であった」と述べている。

一九七三年以来、日本写真家協会の会員でもあった梅棹は、民族誌写真について独自の見識をもっていた。「わたしがつくっているような民族誌写真には、かならず言語情報が付加されていなければならないとかんがえている。……学術写真は映



企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」展示風景

像情報と言語情報との合成物である。こういうかんがえから、わたしはニコンサロンでのわたしの作品に對しても、全部について、みじかくはあるが説明文をくわえた。」

特別展「ウメサオタダオ展」の開催にあわせて公開することにした今回の企画展(六月一四日まで)では、その説明文も含め、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を再現している。民族学者・梅棹忠夫が、カメラ・レンズを通して「眼」をこらした世界。その世界をあらためてみつめなおそうという試みである。

展示場に並ぶ四六点の写真とその説明文を眺めてみると、梅棹が、常に、人と人、集団と集団、あるいは人間と家畜の「関係性」を意識しながらカメラのシャッターを切っていたことが読みとれる。たとえば、一四ページ右下の写真は、一九八〇年に中国で撮影されたものであるが、

写真にとらえられた人びとの表情は、みなやわらかく、微笑みをたたえたものも多い。十分な人間関係ができてから、はじめてカメラを構えたことがうかがわれる。

梅棹が一九八六年に失明するまで愛用していたカメラは、バッグとともにそのまま残されている。カメラはニコンF2フォトリックAS。カメラには五〇ミリの標準レンズが装着され、バッグのなかには、ほかに二三五ミリの望遠レンズが収められていた。しかし、展示されている写真の大半は、望遠ではなく、標準レンズで撮影されたものである。自身の目に見える、その大きさのまま

まに対象をとらえようとしていたことがわかる。そういえば、いつだったか、梅棹と写真の話をしていたときに、梅棹がこういっていたことが思いだされる。

「民族誌写真として、人の生活や、立っている人を撮影するときには、しゃがんで撮ってはいけない」

つまり、わたしたちが人と接するときの視線と同じ位置に、カメラも構えなければならぬというのである。標準レンズの使用とともに、人びとの世界を等身大にとらえようという梅棹の姿勢が改めて確認される。

梅棹は、彼がその研究生生活を通じて世界各地で撮影した約四万点の



チベット族。ネパール王国カトマンズ市郊外、スワヤンボナート寺院にて。チベットのダライラマのラサからの脱出にともない、多数のチベット人が国外に流出した。カトマンズにもかれらの居留テント村が出現し、ラマ教寺院を中心に商業活動もさかんにおこなわれている。写真はチベット族の母子。(1961) 写真・文：梅棹忠夫



梅棹忠夫愛用のカメラとバッグ

写真を、著作権も含めて、生前にすべて民博に寄贈した。民博では、その公開に向けて、現在それらの写真のデータベースを進めている。

企画展示場に並ぶ四六点の写真は、そのなかから、梅棹自身が選びだして、個展という形で世に問うたものである。そこには、民族学者・梅棹忠夫のまなざしが明瞭に刻印されている。そのまなざしを振り返る今回の企画展は、同時に、民族誌写真の意味、つまり文化を異にする人びとと写真を通じてかわることの意味と重みを、あらためて見つめ直す機会でもある。



漢族。中華人民共和国上海特別市虹橋人民公社にて。(1980) 写真：梅棹忠夫 ※説明文は、本文参照

梅棹は説明文でつぎのようにいう。「漢族。中華人民共和国上海特別市虹橋人民公社にて。中庭をかこんで二棟の家屋に、四世代一八人がいっしょにすんでいる。中央の老婦人が第一世代で、一家の中心的存在。ただし、炊事、食事は各核家族にわかれている。一家には、農業従事者もあり、工員もいる。(一九八〇)」

写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」開催一覧

写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」は、これまで、以下の7会場で開催されている。今回の企画展は、その展覧会を民博の企画展として再構成して公開したものである。

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| ① 銀座NIKON SALON | 1982年10月26日-10月31日 |
| ② 大阪NIKON SALON | 1982年12月9日-12月15日 |
| ③ 千里ニュータウン開発記念室「ギャラリー」 | 1983年1月17日-1月31日 |
| ④ 神戸市立博物館 | 1983年3月15日-4月10日 |
| ⑤ 白馬村多目的ホール | 1983年7月25日-8月7日 |
| ⑥ 大阪WTC コスモタワー JICA ギャラリー | 1997年9月12日-10月12日 |
| ⑦ 信濃毎日新聞社本社ロビー | 2010年5月17日-6月5日 |

特別展「ウメサオタダオ展」関連・写真展
企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」
会期：6月14日まで開催中
会場：企画展示場A



「ラヂオ塔」を訪ね歩く

吉井 正彦

メディア・プロデューサー、民博元常務員教授

ラヂオ塔を囲んでの野球中継聴取風景。
京都・円山公園にて(当時)



明石でまち歩き途中、市役所北側の中崎公園にクリーム色の塔を見つけた。「ラヂオ塔」の表示はあるが案内板がない。市役所に飛び込んで、相談係や文化財係に聞いたが知らないという。公園係がようやく探し出したのが、十数年前の壁面塗り替え時の記録だった。京都・円山公園はじめ、いくつかは知っていたが、まとまった記録がないことがわかり、京阪神を手始めに調査に歩き始めた。放送史のなかで埋もれていた

ラヂオ放送の開始は東京放送局(AK)が大正二四年三月三日(仮開局、本放送は七月二日)。この日がNHK放送記念日となっている。大阪放送局(BK)は三カ月遅れて六月一日に開局(本放送は翌年二月一日)。すでに八十余年になる放送史上でも、「ラヂオ塔」は部の局史に記述があるものの、注目されることはなかった。NHK放送博物館には展示がなく、まとまった資料もなく、NHK職員や各地の郷土史担当者も「ラヂオ塔」のことは初見だという。「ラヂオ塔」は、福岡・春日小学校では校歌に歌われ、三重県熊野市では桜の名所として登場するが、それらは送信アンテナを指している、それとは違う。

はじめは関西から

書面上は「公衆用聴取施設」とよばれていた。標準型は四角形の石造りか木製で、高さ二・八、幅一・五メートル。なかには受信機が入っていて、地元局の放送を受信。上部四方の窓にはスピーカーが内蔵されていて、お腹あたりのボタンを押すと、放送が一〇分間流れて自動的に切れた。

昭和五年六月一日、大阪放送局が天王寺公園旧音楽堂跡に設置したのが全国初(大阪放送局の年表では「八月一日」と記述)。塔の周りには、昭和三年に(全国放送は翌年二月から)はじまっていたラヂオ体操に愛好家が集まり、また、早慶戦や中等学校野球大会、大相撲などのスポーツ中継には人だかりができた。その姿は、昭和一〇年代のBKの広報映画に数秒映っているのが昨年判明したが、塔の終焉については、公園事務所にも記録が見られない。

翌六年には、奈良公園猿沢の池端、神戸・湊川公園、七年には京都・円山公園と関西での設置が続き、七年二月の聴取契約一〇〇万件突破を機に全国に拡大。公園や広場、神社境内などに設けられた。一四〜一五年度に急増するが、日中戦争の時期に符合。おりしも各地の新聞は、新聞用紙供給制限(二三年九月)による廃刊が続出。内閣情報局主導による一県一紙への整理・統合で、一二四紙(三年九月)が五四紙へ(七年二月)。その背景には報道統制の意図があったことがうかがえるが、戦時中の放送は戦意高揚のためにも利用され、一六年二月八日太平洋戦争開戦のニュースを、「ラヂオ塔」の前で聞いた人も多かったことだろう。『ラヂオ年鑑』によれば、一七年版では全国三四六カ所、一八年版ではその後さらに二一カ所となっているが、翌年以降は年鑑の発行がなく一覽表が見られない。戦況激しくなるとともに、受信機やスピーカーなどの金属回収もあり、設置は一七年度が最後と見られる。そのころの契約数は六〇〇万。一九年度には戦前のピーク七四七方に達した。思い返せばテレビ開局時、プロレス中継で観客を集めた「街頭テレビ」の光景が折り重なって見えてくる。ラヂオもテレビも新聞同様に世論操作に利用され、また、「販促手法」として活用され、歴史は繰り返されていたのだ。

関西を歩いてみると

「ラヂオ塔」は放送協会が設置し、地元へ寄付するのが基本だが、躯体は地元自治体が設置し、受信機とスピーカーは協会が寄贈したところも。地元篤志家一人で、また、近隣数人での寄付になるところもあり、これら、周辺にはさまざまな物語が埋もれていて、聞きとりができるのも今のうちだ。

塔本体は京都では、円山公園、船岡山公園、橘・紫野柳・小松原・萩の児童公園、八瀬公園、御射山公園など八カ所に現存。大阪では大阪城公園、中之島公園に現存。住吉公園ではデザインを一新して再建され(平成五年一〇月)、堺・大浜公園ではこの春レプリカが再興され、夏にはラヂオ体操が復活する。兵庫では、神戸・湊川公園、尼崎・庄下畔公園、明石・中崎遊園地(当時)、姫路・姫山公園、神戸・東遊園地、甲子園球場前、宝塚公園、洲本、有馬町役場前、阪急沿線伊丹などのリストがあるなか、明石に唯一現存しており、市の都市景観賞を受賞している(平成二二年一〇月)。奈良、和歌山、滋賀にも設置の記録はあるが現存しない。

このほか、横浜・野毛山公園、前橋・前橋公園(文化財指定)、金沢・兼六園、新潟・白山公園、静岡・清水公園、松江放送局前、徳島城址公園などに残っている。

今後の活用と展開は

現在放送を流しているのが新潟・白山公園、大阪・住吉公園。かつては学区や町内会単位でおこなわれていたラヂオ体操を再開し、地域コミュニティの再構築に活用するべく、再興への動きが始まっている。また、災害時の情報メディアの複層化の要請からも、災害対策として整備されている行政防災無線を組み込むことで、そのシンボルとしての役割も期待されている。



大阪・住吉公園
(平成5年再興。デザインは一新)



横浜・野毛山公園(現存)



堺・大浜公園(平成23年3月再興)



明石・中崎公園
(三面に「ラヂオ塔」と「明石市」の表示)

「一、二、三、四、五……」と親指に力を入れて、数字を一生懸命数える王くんの声が教室に響く。「一〇！」と同時に「うわ、負けやー」と残念そうにいう先生を見て、いつもは黙っている静かな王くんがニコリと得意満面に笑う。ここは砂子小学校の日本語教室、王くんと先生が指すもうを指しているのだ。その後、いろいろな表情が並んだ絵カードを見て王くんは「やったー！」の笑顔を指差す。「これは『うれしいです』やね」と先生がいうと、王くんが「うれしいです」と続ける。来日当初は、首を横に振るか縦に振るか、でしか意思表示ができなかった王くんだったが、三カ月目の今日の授業では「このことは漢字ある？」「それ知ってる」など積極的に自分から話すようになっていた。砂子小学校では、五人の先生（一人は中国語の先生）が、さまざまなルーツをもつ子どもたちの日本語支援や中国語による母語支援に取り組んでいる。

しかし、ここに来るまでには試行錯誤の連続だったようだ。「いろんな先生が日本語教室を担当したほうがいい」という坂田校長先生の方針から、二年ごとに日本語教室の担当教師が交代する。日本語教育のプロではない先生たちは、目の前の子どもを何とかしたいと教授法や教材選択に悪戦苦闘を重ねて自分なりのやり方を会得していく。週に一度日本語支援に訪れているわたしにまで、「なんでもいいからアドバイスをください」と助言を求められた。「わかる授業」という原点に立ち返るための打ち合わせが連日遅くまでおこなわ

り」の踊りが披露され、大喝采を浴びていた。低学年の子どもたちは、舞台上立つ誇らしげで堂々とした高学年の姿に数年後の自分を重ね合わせ、「中国にルーツをもつわたし」に気づき、誇りをもつようになるのだ。不登校気味だった女の子が、「民族衣装を着て踊りたい」一心で学校に来て誰よりも熱心に練習し、本番で素晴らしい舞踊を披露したのだが、その達成感が彼女を強くしたのだろうか、その後は休むこともなく学校生活を送っている。砂子小学校を訪れる人は、わたしもそうだったのだが、子どもたちが非常に元気のびのび過ぎていることにきつと驚くだろう。「中国にルーツがある」ことは彼らにとってマイナスどころか、むしろプラスで「ちょっと自慢」（一年生男児）できることなのである。

「多文化共生」の場としての砂子小学校

もちろんこんな砂子小学校でも課題は少なくない。たとえば、日本生まれの「中国にルーツをもつ」子どもたちは、親子の絆の言語である中国語が話せなくなってきたり、「わたしの娘に中国語をしっかりと教えなかったことを今でも後悔しているんです」という中国語の先生は、同じ思いを保護者にさせたくないと土曜日に図書室を利用して中国語母語教室を開いている。「親子で深い話をするために、子どものアイデンティティ保持のために、子どもが親の祖国に誇りをもつために、家庭でもっとも中国語を話してほしい」と中国語の先生は日々親への啓発をおこなっているが、「学校の勉強のほうが大事」という親が多く、母

多文化を
ささえる
人びと

門真市立砂子小学校の取り組み 中国にルーツをもつ子どもたちのために

中国と日本、ふたつのルーツをもつ子どもたちが多く通う門真市立砂子小学校。

ふたつの文化に興味をもち、理解を深めるためのさまざまな取り組みが、教師と児童の二人三脚ですめられている。

高橋 朋子

大阪大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員

れていたようだ。日本語教室は子どもたちだけではなく、教師自身をも大きく成長させている場であると感じたのである。

砂子小学校の取り組み

門真市立砂子小学校の校区には、中国帰国者が集住している三つの府営住宅があり、小学校には中国にルーツをもつ子どもたちが約一〇〇人（全校児童の二七パーセント）も在籍している。校内では大声で中国語を話す子どもたちの姿が普通に見られ、中国語が飛び交うこの状況は、日本人児童にも自然に受け止められている。参観日に、二年生女兒の保護者に「お子さんは中国の友だちと遊んでいますか」と聞いてみたところ「毎日遊んでますよ、娘には日本とか中国とかいう区別はないみたい、『友だちやし遊んでる』って感じですよ。わたしはこれから中国語の時代やし『中国語教えてもらい』っていつてるんやけど」と笑いながら答えてくれた。保護者にもこの環境はごく自然に受け入れられているようだ。

「中国の子どもたちは、ふたつのルーツをもっているんやから、二倍幸せにならなアカン」という校長先生のことばが示すとおり、この学校では中国にルーツをもつ子どもたちが生き生きと活動できる機会が多い。この一年を振り返ってみても、「フイエスタすなご」、「門真市民族フェスティバル」、「門真春節祭」など砂子小学校の国際理解教育を地域に発信するイベントが目白押しであった。日本語教室からは、男子児童による獅子舞、女子児童による「竹結舞」、「火把节（たいまつ祭

語保持の重要性が理解されるのはまだまだ時間がかかりそうだ。

だが、声高に「多文化共生」を叫ばなくても、小さな取り組みを日々ひとつずつ積み重ねて保護者や地域をも巻き込んでいくなかで、砂子小学校は「日本の子どもたちも中国にルーツをもつ子どもたちも互いにその違いを認め合い、胸を張って生きていける場」として着実に歩を進めている。校歌のなかの「翼に傷がついたそんなときにこそ 深い絆で結ばれた 友情と共に 带着友情和勇氣 携手迎向光明未来 前を見て進む 友情と共に」という歌詞はその姿を象徴しているといえるだろう。

砂子小学校の玄関に入ると、日中両言語のあいさつが迎えてくれる



1年生の日本語初期指導
1対1で丁寧におこなわれている



民族フェスティバルで踊りを披露する5年生女子児童



フイエスタすなごで3年生が披露する「中国ごま」

子どもの日と鯉のぼり

風薫ると形容される五月。その風をうけて鯉のぼりが中空を高く泳ぐ。五月五日は「子どもの日」。季節の節目ともされるこの日は、古来より端午の節句あるいは菖蒲の節句とよばれ、その風習は中国に端を発するところ。

成長をねがう

端午の節句は日本では五節句のひとつ。三月三日の上巳の節句（桃の節句、雛まつり）につづく本来は旧暦の行事である。桃にしる菖蒲にしる、そもそも邪気をはらうことが目的であった。女の子や男の子の無事の成長をねがうのも、そこに由来する。それが時代とともにあまたの変遷をくりひろげ、現在につながっている。

「子どもの日」は雛まつりとちがって国民の祝日である。終戦直後の法律では、「子どもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」とある。こどもに男女

の区別はない。だが、男児偏重との議論がくすぶっていたのも事実だ。他方、感謝の対象が母だけであるのも気にかかる。

とはいえ、鯉のぼりを見ると、緋鯉と真鯉の差はあってもオスとメスは区別されていない。昭和初期の童謡では「おおきい真鯉は おとうさんと小さい緋鯉は こどもたち」と歌われていて、父の存在がクロージアアップされている。

鯉のぼりは縁起物である。江戸時代中期からの風習で、黄河上流の竜門をのぼれば竜になるという中国の故事にちなんだものである。まさに登竜門として、立身出世のシンボルとなった。大正時代から歌われてき

た文部省唱歌には「百瀬の滝を登りなば たちまち竜になりぬべきわが身に似よや男子と 空に躍るや鯉のぼり」という歌詞がある。

勝負する

広重の「名所江戸百景」の水道橋・駿河台の図には、手前に真鯉が大きく描かれ、遠くに富士山の小さな姿が見える。そこには鐘馗様を描いた縦長の幟や赤い吹流しもみえるが、尾をくねらせた鯉はきわめて写実的である。

水道橋や駿河台の界限は武家屋敷が軒を連ねていた。戦を本来の家業とする武家にとって、男児の誕生と

国民文化

江戸の武家文化は明治以降、一般の庶民層にひろがった。鯉のぼりは士族だけでなく立身出世を願う国民

の希望のシンボルとなったのである。明治政府によって演出された国民文化は武家の規範をモデルとしていた。質実剛健、質素儉約、良妻賢母、忠君愛国などの精神を特徴とする。こ

れをサムライゼーション（武家化現象）と称して、一九八〇年代の民博のシンポジウムでおおいに議論したことがある。その発想は梅村忠夫初代館長によるが、議論のなかから「町人化現象」という概念も誕生した。

サムライゼーションとは、武士団が解体し、武士道が危機に瀕したとき、逆説的にはあるが、武家文化が国民一般にひろがった生活文化として普及した現象をさしている。

他方、チョウニナイゼーションとは遊芸や道楽の世界を是とする町人文化に由来し、大正期や高度成長期の大衆文化につながると思われた。

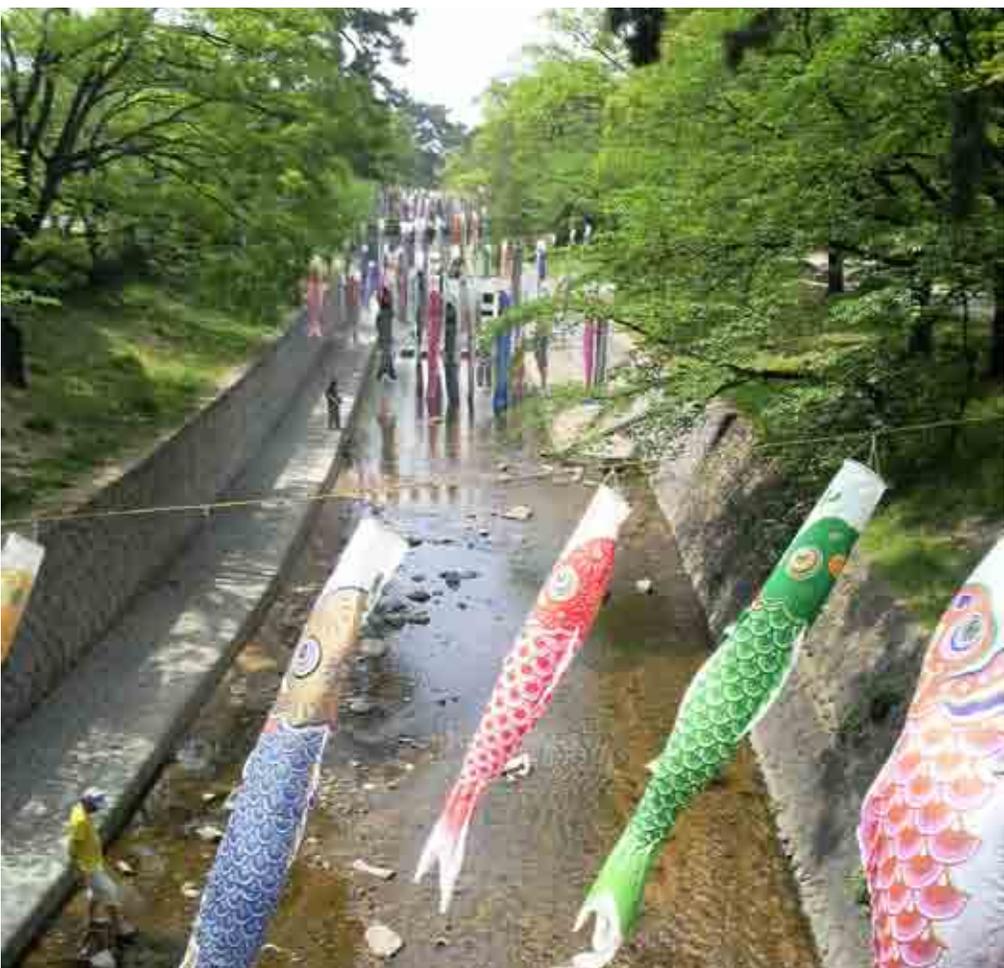
武者人形を飾る端午の節句は男児の成長と出世をねがう武家文化の伝統をひき、鯉のぼりの歌は文部省唱歌にも採用されていたから、国民文化として演出された面がつよい。しかし、町人も武家に負けじと鯉のぼりを立てたというから、江戸時代にすでに武家文化の枠を超えていたともいえる。

二〇年ほど前の調査によると、端午の節句の実施率は約三割であった。雛まつりのそれが約五割であったのに比べると低い値である。鯉のぼりを立てるのはもっぱら父親の仕事で、息子に対する愛情表現になっていると分析されていた。

最後にエピソードをひとつ。

一九九五年五月、阪神・淡路大震災で西宮市の避難所となった香櫨園小学校に静岡県のあるボランティア組織が約五〇〇匹の鯉のぼりを贈った。翌年から、夙川沿いの住民たちはロープを川にわたし、その鯉たちを泳がせるようにした。ところが、年を経るにつれ損傷がすすみ半数がかえなくなつた。そのため住民らが不要となった鯉のぼりの提供を地元呼びかけたが、それを揚げる家庭が少なくなつて思うように集まらなかつた。そこで、ふたたび静岡県や京阪神の静岡県人会などが支援に乗り出し、二〇一〇年五月、あつまつた約二三〇〇匹の鯉の一部が夙川に飾りつけられたという。

二〇一一年三月二日、東北と関東が未曾有の地震と津波にみまわれた。死者や行方不明者は二万七〇〇〇人を超え、罹災者はいまだ不自由な生活をしいられている。五月の空を泳ぐ鯉のぼりは子どもたちに勇気と希望をあたえてくれるにちがいない。



夙川にたなびく静岡県から贈られた鯉のぼり(提供・西宮香櫨園親の会香友会)

聖典の朗誦を競う少女たち

小杉 麻李亜
日本学術振興会特別研究員 (P.D.)

イスラーム世界に広がる朗誦大会

二〇一〇年一月七日、筆者は関西空港発インドネシアの首都ジャカルタ行き飛行機に飛び乗った。三日後に迫ったリアウ州の朗誦大会に駆けつけるためである。

「朗誦大会」というのは、全イスラーム世界が共通にいたたく聖典クルアーン(コーラン)の暗誦の技を競うトーナメント式の大会のことである。朗誦の専門的な訓練を積んだ出場選手たちが、クルアーンを原文のアラビア語のまま、いかに美しく、いかに正確に暗誦できるかを観客と審査員の目と耳の前で披露する。

現在、イスラーム世界の各地で毎年のようにおこなわれている行事であり、そのなかでもインドネシアが特に盛んである。州ごとの予選から始まり、そこを勝ち抜くと全国大会が待っている。全国大会は二千数百人が一堂に会し、国内最高水準の学者一〇〇人の前で戦いを繰り広げ、トップの座を競う。

さらに、全国大会の優勝者らは国際大会への足がかりをつかむことができる。国際大会できたならば、国際的な朗誦家としての輝かしい未来や国内の宗教界での確固たる役目が待っている。女性朗誦家は、国際的な場では中東男性たちの戸惑いや憤慨に出会ったり、性別による観客の限定などの驚くべき文化の違いにも遭遇しながら、経験を重ねていく。

待ちに待った州大会

さて、いよいよリアウ州の州大会である。クライマックスは全国大会であるが、その前に最大の関門、道の途中の激戦区であるのが州大会である。今回調査をおこなったリアウ州の大会は全国三三州のなかでも最大のもののひとつとされる。



出番を待つ選手ら。県チームごとのそろいのユニフォーム



このステージを含む中央会場は本大会のために新設された

をリードしているのは、伝統的に朗誦の中心地のひとつであるエジプトや、メロデーをつけずに誦む流派の発信地となっているサウジアラビア、二〇世紀後半以降東南アジアの諸国を中心とした国際大会を主催し続けるマレーシアなど十数カ国である。

筆者はこの八年ほど、朗誦の訓練を専門的に積んでいる幼児から二〇代までの女性たちの調査をおこなっている。その過程で、初めて全国大会の内部に入ることができたのが二〇〇六年の夏のことで、そのときはスラウエシ島の地方都市クンダリまで、ジャカルタの選手団とともに駆けつけた。

今回は州大会であるので、航空券の確保はそれほど困難ではない。ジャワ島にあるジャカルタからスマトラ島のリアウ州の州都プカルバルへ飛び、そこから車をチャーターして開催地クアンタンシンギンギへ四時間かけて向かう。リアウ州には十数の県が存在し、各県三十数人の選手と、コーチ、会計、県の公務員、運転手らが現地入りしていた。選手の健康管理のために、医者と看護婦までもが付き添う。慣れない気候のせいで遠くからの参加者たちは体調を崩していたが、選手たちはみな年若く、試合時の緊張とは裏腹に同世代の仲間との共同生活を満喫していた。

少女が聖なることばの器となる時

ある日の昼下がり、ドアの間隙から少女の奏でる甲高い朗誦の声が聞こえて来た。隣の部屋を覗くと、試合を間近に控えた選手がコーチの手本に続いて、懸命に真剣な面持ちで旋律の流れの最後の仕上げをしていた。その顔には普段のあどけない表情が消え失せ、荘厳な気魄が宿っていた。筆者はいつもこの変貌の瞬間を目にすると、



選手たちはのどによいとされる熱さましドリンクを常備している

従来は中東地域が朗誦の本拠地であった。ここでは朗誦家といえは、中年・老年の男性である。二〇世紀後半にラジオやレコードが普及し、それとともにフサリー師やイスマール師らエジプト出身の大朗誦家の朗誦が世界を席巻した。彼らの録音は現在でも愛され続け、彼らの後継も現在でもすべて年のいった男性たちである。

一方、東南アジアではプロの朗誦の世界は男だけの世界ではない。そこには年若い女性や少女たちが朗誦の重要な担い手としていきいきと活躍する東南アジア特有の世界が広がっている。インドネシアの少年少女にとって、朗誦大会は不可欠なキャリアパスである。大会に出場するような選手たちは、生まれた村で幼少時に特別な才能を見出されるか、親のどちらかからその職能を継ぐことが多い。周囲の支援を受けてひとつずつ頂上に向かって階段を上って行き、その果てに全国大会での入賞を夢見る。さらに、その天井を突き破って世界の舞台へ立ったならば、そしてそこでアラブの人びとと互角に戦い、勝利することが

不思議な気持ちがある。普段はおしゃれが好きで、級友にからかわれたことを気に病んで、家族が大好きで、深夜の夕食が楽しくて、筆者と笑い合っている。その子にはもはやどこにもいない。極度に集中して、外界から遮断されて視線は焦点を失い、全身から聖なることばをほとばしるようにひねり出す。少女は忽然と姿を消し、ただ、聖なることばの器として立ちあらわれている。その瞬間を目の当たりにすることの驚きは、何度経験してもいまだに鮮烈である。州大会は年に一度、日本の季節でいえば秋か春にある。筆者は今、少女たちの変貌の瞬間の煌めきを解き明かすために、次の大会を待っている。

5月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※特別展開催中のウィークエンド・サロンでは13回にわたりみんなくの名誉教授が初代館長・梅棹忠夫についてお話しします。

1日

(日曜日)

話者：小山修三（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹さんに聞いたこと

場所：特別展示館

8日

(日曜日)

話者：大塚和義（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹忠夫と大興安嶺探検、そして私

場所：特別展示館

15日

(日曜日)

話者：伊藤幹治（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹忠夫と自前の学問

場所：特別展示館

22日

(日曜日)

話者：片倉もとこ（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹忠夫とイスラーム世界

場所：特別展示館

29日

(日曜日)

話者：栗田靖之（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹忠夫先生が登った白頭山

場所：特別展示館

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
- ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

東日本大震災をどう乗り越え将来につなげるか。コミュニティの再生を進めるうえで新しい公共の考え方を取り入れるとともに、オルタナティブ（代替）の考え方をもう一度見つめ直すのも、将来を考える一助ではないかと思う。

オルタナティブということばが知られるようになったのは、1973年の第一次石油ショック後のこと、右肩上がり神話を見直し、多様性を模索する動きの一環だった。巨大技術のもろさが露呈した今こそ、別の技術やシステムの可能性を探ること、たとえば、自然エネルギーの活用にも本腰を入れ、食料だけでなくエネルギーについても地産地消を目指してはどうか。グローバル化がじつは代替手段のない相互依存性を強めたことに気づいた今、可能な限り地域での自足を心がけるのもひとつの考え方だろう。その範を江戸時代に求める議論が盛んだった時期がある。梅棹さんも、鎖国をマイナスとだけ捉えず、自給自足モデルとして再評価すべきではと考えていた。

多少の不便をオルタナティブな技術や考え方で補完し、安心・安全な生活スタイルへ転換すること、それは被災され亡くなられた方々の無念を、わたしたちが前向きに生かす道のひとつかも知れない。(久保正敏)

●表紙 土人形（太ったチャラン） H0210463 ファナ・ソサ作
制作地：チュルカナス、ペルー 制作年：1990年

次号の予告

特集

骨——どこから来たの？どこへ行くの？(仮)

月刊みんなく 2011年5月号

第35巻第5号通巻第404号 2011年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 久保正敏（編集長） 朝倉敏夫 櫻永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一敏
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある万博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

